Prompt 2005
大仙市教育研究所報 プロンプト 第1号 8月8日発行

ごあいさつ

大仙市長 栗林次美

この度、市民の皆様の負託を受け、初代大仙市長として市政を担当させて頂くこととなりました。大仙市教育研究所報「*Prompt*（プロンプト）」の記念すべき創刊号発行にあたり、一言お祝いとご挨拶を申し上げます。

今回の合併により、大仙市は９つの幼稚園、３１の小学校、そして１２の中学校で、気持ちも新たに新年度のスタートを切ることができました。それぞれの地域で、それぞれ固有の文化や学校独自の特色を大事にしながらも、同じ大仙市の仲間として、調和と連携を大事に進んでいっていただきたいと思っております。

８６６.６８㎢の「おおきなせなかに」、約９６,０００人の「夢を乗せ」、大仙市が「未来に羽ばたく元気なまち」となることを目指し、「住民との協働」、「大仙市の均衡ある発展」をキーワードにまちづくりを進めてまいります。教育に関しましては、新市の重点政策ととらえ教育委員会が中心となり、学校現場の視点に立ち、各校が安心して教育活動を営むことができますよう、市としてもできる限りの支援をしてまいりたいと考えております。大仙市は誕生したばかりであり、教育の面では「学力の向上」「二学期制の円滑な実施」「学校情報管理の徹底」など多くの課題を抱えながらのスタートではありますが、「理想を掲げ、夢をはぐくみ、日々歩み重ねる、大仙市の学校教育」の教育指針のもと、教育関係者が心を一つに諸課題に取り組み、生き生きとした大仙市学校教育を創ってくださいますようお願い申し上げ、創刊のお祝いの言葉といたします。

軌道

事業一覧（４月～８月） 大仙市教育研究所 所管

4月26日（火）	大仙市教職員研究集会
5月第 4 週	大仙市学習定着度調査実施
5月25日（水）	初任者研修Ⅰ
6月 1日（水）	第１回大仙市校長会
6月16日（木）	大仙市学習状況調査分析結果報告
7月15日（金）	第１回社会科副読本編集委員会
8月 5日（金）	初任者研修Ⅱ
8月17日（水）	第２回大仙市校長会

こぞって「温かさ」を育む

教育長　笹元嘉辰

「♪希望という名のあなたをたずねて　遠い国へとまた汽車に乗る……」。岸洋子が歌って昭和の一時期を風靡した「希望」の出だしである。去った恋人を追い続ける悲恋の歌であるが、彼女の低音が沁みて、私の好きな歌の一つであった。

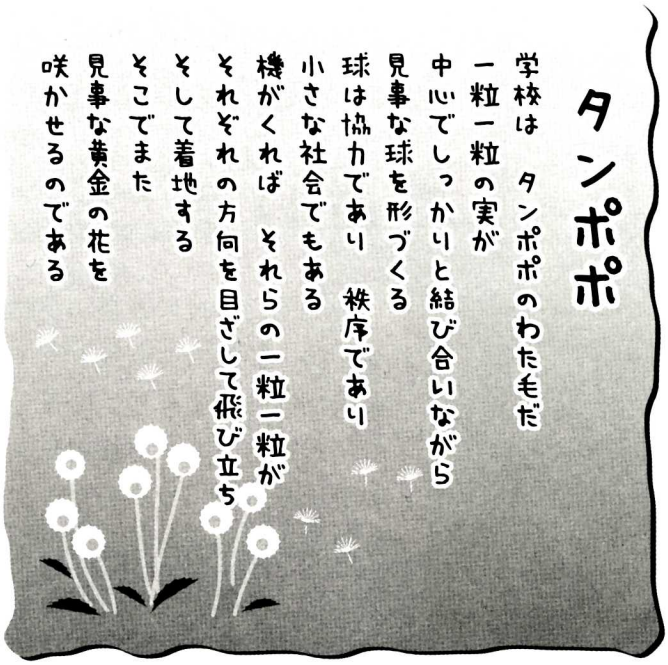
話が変わるが、「おおきなせなかに夢を乗せ、未来に羽ばたく元気なまち」をスローガンに新市が誕生し、汽車は動き始めている。

大仙市の教育も始動した。市内各園・各校、そして市民の方々共々に一体感を共有しながら、希望列車で進みたい。

7月5日からスタートした「学校応援訪問」と銘打った訪問も、園と学校、そして行政が同一歩調をとりながら歩みたいとの強い思いから企画したものであった。

こうした歩調の中で育みたいもの。一言で言えば「人間力」であろうか。「人間関係構築力」と言ってもいい。健全な社会人として生きる基盤を培うところが園・学校である。こぞって温かい人間を育成したい。喪失した人間性の復活こそが現代の大きな命題であり、急務でもある。

ところで、去る4月26日の大仙市教職員集会で、ポロリと披瀝してしまった「タンポポ」の詩？を、後日何人かの先生から所望されたので、恥をしのび、厚かましくも再びここに載せていただく。



校長を務めさせていただいた昔のある日の所感を書きつけたものであった。タンポポの繁殖力には困惑のむきもあるが、その強さをよしとして、あえてことばにしたものであった。

私事で恐縮だが、この1月に右眼の網膜剥離を患った。2回の手術で治癒したが、視力は歪みの激しい0．1である。見える風景はダリの絵である。健康だった過去が懐かしい。しかし、どんな状況でも「希望」は掲げるべきものだと自分を励ましている。

大仙市の教育行政を、今しばしの間担当させて頂くので、従前同様どうぞよろしく。

Prompt（プロンプト）

大仙市教育研究所報の新名称を「*Prompt*（プロンプト）」としました。「*Prompt*」には、「1．さっそくの、即座の」「2．敏速な、すばやい」「3．進んで…する」〔新コンサイス英和辞典（三省堂）〕という意味があります。また、教育用語として、「子どもが適切な行動を行いやすくするため、『ほら、今だよ』などとタイミングよく手がかりやヒントを与えたり、手を取って導いたりする」という意味もあります。

平成の大合併により、本研究所も大仙市教育研究所と名前を変えて新たなスタートを切りました。このような激しい社会の変化に敏速に対応し、各学校が「大仙市の目指す教育」に向けて進んでいく上で、いくらかでもヒントや手助けとなればという願いを込めて、発信していきたいと思います。今後とも、よろしくお願いします。

大仙市教育研究所長　佐藤　康裕

ひろがる学級づくり

大仙市立大曲南中学校長　渋 谷 孝 勝

子どもは本来、知的好奇心が旺盛で活動的であり、友達と群れて遊ぶことを好み、結果としてよりよい自己実現を果たしたいと願っているものである。

しかし、現実的には、何か物事をするにも中途半端に終わり、友達とも深くかかわれないまま漠然とした不安感や脱力感を感じつつ、ストレスを重ね、そうした心のうっ積を解消するのが、悪ふざけ、ゲーム、いじめでありエスカレートしたのが「遊び型非行」といわれる問題行動ではないだろうか。「切れる、ムカつく、ウザイ」に代表される中学生の問題行動も、原因はこうした心の有り様がその背景にあるのではと思う。

中学校は進路選択の大事な時期であり、十五の春への不安感は無視出来ない。個々の子どもの評価にかかわる選抜試験という一つの試練に立たされるまでに学力をはじめとした個人の評価が問われる選抜試験。昨年度から導入された本県の選抜制度、前期、一般、後期と体験した生徒の「あと落ちたくない!」と言った一言が忘れられない。

子どもたちは生活の大半を学校という場で過ごす。ベネッセ教育研究所のモノグラフ中学生の「学校内の人間関係」によれば、現在の子どもたちの生活の様子がある程度見えてくる。まず教室をのんびりできる場（心を開放する場）ととらえていない生徒が約44％。これは大きな問題である。のんびりできると答えた割合が高い値となっている場は、身体を動かしての活動が中心だったり、比較的楽な気持ちで居られる、体育館、図書室、音楽室、美術室、保健室である。

このことから私たちは、友達や教師など人間とかかわる事を通じて、心を開き、共に居ることを喜びとする学級づくりの必要性を感じる。子どもたちは大半を学級という集団の中で過ごす。学級は試行錯誤が許される、かかわりづくりを学ぶ道場である。個々の生き方を練り上げ、磨き合うことができるのである。そうした学級経営・学年経営が子どもたちを育てるのである。

地域の中の学校、学校の中の地域

大仙市立神宮寺小学校教頭　小 笠 原　重　夫

元オフコース大間ジロー氏による音楽教室

市町村合併により、新市町はその力が試される時代を迎えている。同様に、市町村立の学校もその独創性が試される時代になった。財政的な裏付けについての先行きが見えない今、独創的な学校として生き残れるかどうかは、どれだけ地域住民の力を引き出せるかどうかにかかっているように思う。

この春、8年ぶりに現場に復帰した。様々な教育改革が行われた激変・激動期に、ぽっかりあいた8年の期間。現場はさぞ大きく変化しているだろうと、復帰する時はかなり不安だった。ところが、復帰してみると現場は8年前と大きくは変わっていなかった。

今年度、目標管理による人事評価システムが試行された。行政での8年間で培ったマネジメントのノウハウや人的つながりなどを生かしてこれに取り組むとしたら、何と言っても「開かれた学校づくり」の分野だと思い、今年度の自分のマニフェストを「学校を地域に開く。しかも徹底的に開く。」という趣旨のものにした。

そこで、現在地域の人や社会教育のプロを講師として学校に招いたり、逆に子どもと教師が公民館や施設に出向いたり、そうした機会と場を盛んに増やして授業の幅を広げる取り組みを行っている。

また、空き教室を利用して「地域ふれあいルーム」をつくり、保護者や地域住民の拠点づくりも進めている。そこに、親や地域の人々、ボランティアもまじったネットワークができれば、子どもにとっても大人にとっても「出会いと学びの場」となるだろう。

学校教育が、学校の中だけで完結する時代は終わったと言われて久しい。これからは、保護者や地域住民はもちろん、地域の青少年関係団体・スポーツ団体・ボランティア・NPOなどの市民セクターや関係機関と、もっともっとパートナーシップを深めていきたい。

谷京子さんをお招きした読み聞かせ会

伝統の大綱のように

大仙市立刈和野小学校教諭　佐 川 喜 一

旧刈和野小と旧大沢郷東小が統合されて、10年。今年は刈和野小にとって記念の年である。この10年間、地域・保護者・学校が一体となって子どもたちを育ててきた。

今年度前半最大の行事は、5月28日に行われた運動会であった。地域・保護者・学校が一体となって交流する場として、子どもたちの主体的な活動を中心に、大人が温かいまなざしで見守りつつ、刈和野小学校区の力が一つになり共につくり上げるものとして行われている。

幼児から一般，祖父母の方々まで、26の種目を楽しんだ。1年生の玉入れや2年生のボール送りを、祖父母といっしょに競技したり、新西仙北町音頭を地域の方々と子どもたちが輪になって踊ったり。そこには、地域の方々と子どもたちのふれ合いがあった。また、一般の方々の綱引きは、気迫のあるものであった。6年生の色別リーダーや応援団長を中心にした色別の応援も、例年にも増して迫力あり色別グループの団結をアピールした。

毎年、朝6時の烽火を合図にして始まり、午後3時の片付けまで充実している行事である。

最近、学校行事の見直しが行われ運動会の内容が縮小傾向にある中、地域のまとまりやパワーが感じられる本校の運動会は、地域と学校が子どもたちを育てる場として、より充実させていきたいものの一つである。伝統の大綱のように、みんなの手で編みあげていきたいと考える。

◀1年生に負けないぞ

ジョイヤサ
ジョイヤサ▶

「元気いっぱい中仙幼稚園」

大仙市立中仙幼稚園

おはよう　にこにこ　うれしいな
おててつないで　　元気よく
おうたが　いっぱい
おはなし　いっぱい
たのしい　中仙幼稚園

園歌のように、毎朝24名（4、5歳児）の子ども達が、元気に登園してきます。春には親子遠足、夏にはプール遊びや夕涼み会、秋には運動会やいも掘り、冬は餅つき大会や雪遊びと、四季折々に子ども達だけでなく、父母、そして家族も巻き込んでの行事を楽しんでいます。小規模園ならではの温かい家庭的な雰囲気を大切に毎日を過ごしています。

40年前の昭和41年に開園された当園も、その場所を3回変え現在は中仙小学校の隣で今日に至っております。当時幼稚園児だった方々も、今は園児達の親としてＰＴＡ活動を中心に幼稚園を側面から支えてくださっており、常に感謝していることでもあります。

そして、今年度の主な活動や目標として

(1) 中仙地域の外国語指導助手のブランド先生と交流しながら子ども達が英語や外国の事に興味や関心をもてるようにしていこう。

(2) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したりするようになるための物的・空間的環境の構成を考えた保育内容はどうあればよいか。

の2点があり、特に (2) については、10月に当園を会場に開催される「秋田県南地区公立幼稚園教育研究協議会」のテーマの1つでもあり課題でもあります。少ない職員ではありますが、共通理解を深めて1日1日の積み重ねを大切にしていきたいと話し合っています。

また、全国的に幼保共有施設、統合施設が話題になっている昨今、旧中仙町からの計画で長野地区に建設中の幼保合築園舎　も間もなく完成し、8月1日から「中仙ワイワイランド」の中に「中仙幼稚園」として移転、保育を開始することになっております。これ迄以上に、子ども達・地域の方達に親しまれる幼稚園づくりをと、職員一同思いを新たにしているところです。

長野山をバックに積木をイメージした園舎が建っています。

みそ樽の子どもの館やウッディピラミッドで仲良く遊んでいます。

学校紹介

「明るい笑顔の荒小っ子」

大仙市立荒川小学校 児童代表 6年　石 川 桃 子

「ひびけあいさつ、明るい笑顔の荒小っ子」のテーマのもと、毎朝、各委員会の委員が玄関前に立って、「おはよう」と、全校のみんなを明るいあいさつでむかえます。そのおかげで今は進んであいさつしてくれる人がふえてきました。地域の人たちにも「あいさつがいいね。」とほめていただいたことが、みんなのはげみになっています。

また、荒川小学校では楽しい集会をたくさん計画しています。例えば、6月に行った「本は友達」集会です。ボランティアの方々が読み聞かせをしてくださいました。それに楽しい歌やピアノも聞かせてくださいました。他にも、各学年の音読やおすすめの本の紹介などもあり、本が大好きな私にとって、とても楽しい時間でした。11月に2回目の「本は友達」集会が計画されています。今からとても楽しみです。

花の苗植え

本はともだち集会

もう一つがんばってること、それは、学校を花いっぱいにしようということです。これも地域の人たちといっしょの活動です。校舎のまわりの花だんに花の苗植えをしました。ベゴニア、マリーゴールド、サルビアなど6種類の花を植えました。オレンジや黄色、ピンクのきれいな色で、私たちを楽しませてくれています。畑のサツマイモやいろいろな野菜の生長も楽しみです。

学校紹介

大仙市立太田中学校 生徒会代表　小 松 美沙紀

太田町立太田中学校は、今年3月に太田町や大曲市を含めた市町村で合併が行われたため、大仙市立太田中学校となりました。私たち、太田中の自慢といえば、花壇が一番に考えつきます。

太田中学校の花壇はこれまで多くの賞を受賞し、今年度より、秋田県のモデル花壇に指定されました。デザインを考え、植え、育て、摘むなど、ほとんどの作業を生徒の手で行うので、暑い中での作業や朝の水やりなど、とても大変ですし、正直面倒にさえ感じます。しかし、二階の教室から花満開の頃の花壇を見下ろすと、自然と「おぉ」や「すごい」などと、声が出てしまうほどの素晴らしさです。

そして、花壇の花。これを今年度は、ＪＲＣ活動の収益金で買う事になりました。

太田中は全校生徒がＪＲＣ会員なので、全員がＪＲＣ活動に参加します。一番大きな、アルミ缶回収の活動では、先程の通り花壇の花を購入したり、施設へ物を寄付したりするため、アルミ缶をお金にかえます。このアルミ缶回収の活動ネーム、今年はユニークなものになりました。「Ｉ♡ドッ缶」です。生徒はもちろん、地域の皆さま方にも協力して頂き、たくさん缶を集める事ができるといいです。

もちろん、盛んなのはＪＲＣ活動だけではありません。

生徒会活動として、「朝の挨拶運動」を月初めに行っています。これは「絆爽校～想いあふれる学校へ～」という生徒会スローガンにも当てはまる活動です。今年度のスローガンは「爽やかな挨拶と思いやりあふれる学校づくり」というテーマからつくられました。互いを想いやって絆がうまれ、爽やかな挨拶が交わせる学校になってほしいという願いが込められています。太中生には記憶にまだ新しいと思いますが、自転車へのイタズラが相次いで起きました。想い合う事で、このような事がなくなれば…とも考えずにはいられません。生徒にはこのスローガンとその意味を理解し、そして定着させていってほしいと考えています。

この他、文化祭（太中祭）や体育祭を含めた「太中四大祭」も計画しているところです。中でも太中祭は、地域の人々との交流を深め、学校をよりよくするのに良い機会だと思います。旧太田町内に限らず、他の地区、学校の皆さんも大歓迎です。

太田中学校は、個性と想いやりの沢山詰まった学校です。イベントの日に限らず、いつでもいらして下さい。爽やかな挨拶と、美しい花壇で皆さんをお迎えさせて頂きます!!!!!

研究指定校紹介

文部科学省指定「キャリア教育推進地域指定事業」

キャリア教育の推進について

南外・西仙北地区キャリア教育推進地域事務局（南外村）

平成16年度～平成18年度の三年間、文部科学省より『キャリア教育推進地域』として、南外・西仙北地区が研究指定地域となり、南楢岡小学校・南外西小学校・南外中学校・西仙北高等学校が実践協力校として研究を実践することになりました。

『キャリア教育』の研究については、文部科学省でも、平成16年度から新たに研究推進に加わったたものです。秋田県では、この地域が初めての研究指定となる新しい取り組みです。文部科学省では『キャリア教育』を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」ととらえ、端的には、『児童生徒の一人一人の勤労観、職業観を育てる教育』としています。

現在、産業・雇用の構造的変化や今日の厳しい経済情勢に伴って、学校生活から職業生活への円滑な移行が難しい状況が生じてきています。例えば，フリーターやニート（若年無業者）の増加や、就職後の早期離職する若者の比率も高くなっています。これらのことが近い将来我が国の経済・社会の基盤を危うくするのではないかと心配する声もあります。一方、ニート等の増加の背景には、若者自身の資質等をめぐる課題や精神的・社会的自立の遅れ、進路意識や目的意識が希薄のまま「とりあえず」進学したりする若者の増加があり、働くことへの関心・意欲の低さ、目的意識・基本的マナー等の欠如、未熟な対人関係などが指摘されています。働くことなどを含め様々な体験の機会や異年齢との交流の場が乏しくなってきていることがその要因として考えられます。

清掃のプロから学ぶ

これらの課題を克服し、子どもたち自身が、自己のよさや可能性に気づき，夢や希望をもち，その実現に向けて努力していくことができるよう、学校・家庭・地域社会（企業等も含む）が連携して、小学校段階から高校まで系統的・計画的にキャリア教育の充実と積極的な推進が求められています。

これらを踏まえ、南外・西仙北地区では、キャリア教育に関する様々な研究を昨年度から実施しております。詳しくは、南外中学校ホームページ（http://www.obako.or.jp/nangai1/）に研究推進の一端を掲載してありますので、ご覧ください。今後の研究に役立てたいと思いますので、御意見・感想をお寄せいただければ幸いです。

文部科学省指定「豊かな体験活動推進事業（命の大切さを学ばせる体験活動）」

「命の大切さ」を学ばせる体験の調査研究

大仙市仙北中学校教諭　藤島光明

昨今、小中学校を舞台とした殺傷事件が度々起きている。こうした事件の背景として自他の生命のかけがえのなさなどについての実感が育まれていなかったり、自分の感情を適切にコントロールできないなど自己抑制力が培われていないというようなことが言われている。本校は平成17、18年度文部科学省から豊かな体験活動推進事業（「命の大切さを学ばせる体験活動に関する調査研究」）の委託を受けた。そこで今年度、本校では社会性や豊かな人間性を育み「命の大切さ」を実感させるために有効な体験活動と成りうるかどうかについて調査研究を推進することにした。

具体的には、Ⅰ学校実習田での稲作体験、Ⅱ大仙市等での職場体験、Ⅲ老人福祉施設や幼稚園の訪問、などを計画している。これまでに実施された体験活動は、生徒が実際に自然と触れ合いながら命の大切さに気付くことを目的とした「学校田の手植え体験」である。ある生徒は「昨年はただ言われたままに植えていましたが、今年は自分で手植えをすることによって命を植えると意識したことで大切なことが見つかった気がします…」と感想を寄せた。意識調査の結果から、「命を植える」という意識を持って手植えすることにより、「体験を有意義でない」とする生徒が体験実施前の29人から17人に減少した。このことから「命」を意識させて手植えさせることは体験に対する心情や態度に変容をもたらすことがわかった。

今年度はそれぞの体験活動が「命の大切さ」を学ばせるのに有効かどうか検証し、来年度はその手立てを具体的に考えていく予定である。

学校田の手植え体験